機械怪物戦争ザーベオン

エーシュルング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
機械怪物戦争ザーベオン

【Ｎコード】
Ｎ２０５６Ｊ

【作者名】
エーシュルング

【あらすじ】
機械の怪物の棲む星ザーン。人類は制御装置で彼ら、ザーベオンを意のままに操る手法を確立。
次に考えられたのはザーベオンの軍事利用だった。

CHAPTER　1　開戦

衛星ザーン。

この星では、ザーベオンと呼ばれるメカモンスターが生息していた。

そして人間はザーベオンを操縦して戦争をしていた。

この星にはジュベロ大陸とワンスーク大陸があり、ジュベロ大陸はアルデ、ワンスーク大陸北部は帝王国、南部はバンズ公国が領土としていた。

第一次三国間戦争は１７２１年に行われた。

そして、その四十二年後の１７６３年。ついに第二次三国間戦争が始まったのである。

＜開戦から一ヵ月後＞

＜ジュベロ大陸東端　グォース海岸＞

戦争が始まってから、アルデ軍は砂浜にやぐらを立てて、そこに二人、または三人、ときに一人の兵士を置いていた。

やぐらのような高みに立てば、普段と違った目線で遠くも見えようというもの。来るべき帝王国軍の侵攻には、このような地道な努力こそが大切だった。転ばぬためには先の杖。

このやぐらにいるのは、呉山（ごやま）と疑島（ぎしま）という、二人のアルデ兵だ。
疑島は双眼鏡片手に水平線を睨んでいたが、呉山の方にはもはや任務への熱意も無かった。
やぐらの上に据えられたリクライニングシートに崩れるように座り、雑誌の上に目をさまよわせるのみ。もう何万回とこの雑誌を読んだことだろう。呉山は思った。
ここに配置されたときは、上官に感謝感激したものだ。これで、基地にて匍匐前進や、ザーベオンという巨大な化け物の飼育に腐心しないで済む。
しかし、現実は甘くは無かった。このやぐらの周囲五十キロメートルには人一人住んでいない。そりゃ、足の速いザーベオンに乗れば一時間とかからず首都ファラーデまですっ飛んでいけるが、無許可離隊はよくないことだった。
無人の海岸を見張るという単調の日々の中、呉山は退屈のあまり、発狂しかけている。
いまだに奇声を発して、やぐらの床をどんどん叩き始めていない理由は、ひとえに疑島がこの一ヶ月の間、まじめに海を監視していて、それを邪魔することはいかな呉山といえども、できがたかったのだ。
疑島の邪魔にならないよう、呉山はページを音をたてぬようにめくったり、居眠りをするとかして一ヶ月を乗り切ってきた。
疑島のやる気を見習ってはどうなのだ。呉山は己に問いかけてた。だが、無理だ。自分が、どうにもならない状況に陥ってしまった事実を知る。
もはや、双眼鏡を海に向ける覇気は無く、リクライニングさせた椅子を起こすことすらできない。
もう限界だ。自分はおかしくなりつつある。かつては滑らかだった呉山の顔も、いまや髭にまみれて野蛮人と見紛うばかり。
一体、帝王国軍は何をやっているのか。宣戦布告から一ヶ月もたつのに、何の音沙汰も無い。やる気あるのか。

「敵は見えるか？」
呉山は尋ねてみた。これまた、何万回と発した台詞。
「いんや」
いつも通り、疑島は首を振った。
「本当に帝王国は宣戦布告してきたのか？　本当はバンズとだけ戦争するつもりなのを、番号を間違えてうちに電話してしまっただけなのかもしれない」
甘美な幻想を語ってみるが、疑島は低い声で否定する。
「いんや」
「じゃあ、バンズは我々の敵か？」
「いんや」
もう尋ねるべきことも無かった。呉山はやむなく、雑誌に目を落とす。
限界だ。この地獄のような状況を脱したい。
帝王国軍、早く来てくれ……。呉山は、正気を確実に失いつつあることを自覚しながら、雑誌を読み終える。
「敵は見えるか？」
再びこのカンバセーションを口にする。同じ返答を聞き、もう一度絶望するために。
「ああ」
疑島が首を縦に振る。
そうか、願望が満たされ、地獄から開放されるには、疑島がこうやって答えてくれるしかないのか。
「数はどのくらいだ？」
「海上戦力で八十匹ぐらい」
なるほど、八十匹。
「で、敵というのは帝王国なんだな」
「当然だろう」
疑島がゆっくりと横に動いた。いままで呉山に隠されていた水平線が目に飛び込んでくる。

水平線は帝王国軍上陸兵団で埋まっていた。空には防空のための飛行ザーベオン。
呉山は口をあんぐりと開け、目をこぼれんばかりに見開いた。声を出すこともできず、体は硬直し、顔は死人のように真っ青だ。
帝王国軍。本当に来やがった。戦争をするために、この地を征服するために、わざわざ大軍で海を渡ってきやがった。
これが自分を救うためにやってきた連中なのか。しかし、その姿はあまりに邪悪だ。
呉山は理解した。いままでの一ヶ月は地獄などではなかった。
地獄は始まったばかりなのだ。
海上の帝王国軍が艦砲射撃を開始した。やぐらの周りにいくつも火柱が立つ。呉山はわーっと叫び、ようやく思考停止状態から解放される。
「急げ、警報を鳴らすんだ！」
鬼気迫る形相で疑島に命じた。
「あいよ」
疑島は落ち着いた顔で、やぐらに備え付けられたボタンを押す。
さすがは疑島だ。
次は何をするべきなのだ。やぐらには通信機も備え付けられていて、アルデ軍通信基地に通じている。これを使えということなのだろうか。
さらに帝王国軍の砲撃が繰り返される。敵はここに自分たちがいることを知っているのだ。
呉山は爆風によろめき、やぐらの床に伏せると泣き始めた。自分の安楽を祈ったあまり、帝王国軍の大軍がやってきた。
「ああ、原始の神様、お願いです、今日からあんたを毎日拝みますから、この地獄から――」
爆発で舞い上がった土が雨のように呉山を叩く。
そうだ、疑島は？　こんなとき、彼ならどうしている？　彼は完璧にやぐらを保持してきたではないか。

呉山は疑島の方を向いた。
「って、逃げんの、早ぇ！」
疑島が内地に向かって走っている姿が小さく見えた。もうやぐらから五百メートルは離れている。
呉山は罵声と哀願と悲鳴の混じったわけの分からない言語をわめきながら、やぐらから飛び降りた。その際に片足の骨がへし折れる。もはや走ることなどできなくなった。大声の発生源目掛けて、砲弾が降り注ぐ中、呉山は一段と声を大にしつつ、足を引きずりつつ逃げた。逃げて逃げて逃げ続けた。

1―1　グォース海岸上陸戦

＜アルデ軍通信基地＞

ここは近代的なドームやタワーの並ぶ整頓とした見た目ながら、基地の中の人間やザーベオンは落ち着いた気性という、居心地のいい基地だった。

三人の男が、過去の思い出について語り明かす夜を過ごしていた。

孫考（そんこう）　小三郎（こさぶろう）。アルデ軍通信隊長。目は開けているが、起きているのかどうかはよく分からない雰囲気の若い男で、起伏に乏しい顔の上、髪の毛を完全に頭になで付けている。

関拍寺（かんぱくじ）　宋西（そうせい）。アルデ軍作戦隊長。こちらは打って変わって、コーヒーか、さもなければ覚醒剤を取りすぎた人間の目を、厚い眼鏡の向こうで光らす男だった。口調もガミガミとしているので、話しかけられると話し相手は必要以上に謝らなくてはならない気分になる。

大程（おおほど）　保家（ぼけお）男。アルデ軍補給隊長。常人には判別不能な問題に苦しむ芸術家のように、胃の重そうな顔をしているかと思えば、次の瞬間には鼻歌を歌っていると言う男で、彼を扱える人間はアルデには極めて少なかった。

こういう晩は、手の中にバンズ・ウイスキーのカップなどあるべきだったが、バンズ公国が帝王国に攻め込まれて以来、アルデにはバンズ・ウイスキーが届かなくなっていた。貨物船が帝王国のザーベオンに沈められているらしい。

万事休（バンズ）すだ。ウイスキーは無い。

おかげで三人は手ぶら、気分も盛り上がらない。しかし、素面であることが効を奏したのだろうか、大程の卒業試験での失策が明るみに出て、三人の共通の思い出はより正確なものへと修正された。大きな収穫で、三人の間に満足感がもたらされた。

通信機が音をたてる。ここは通信基地なので、通信機が腐るほど

置いてあるのだ。三人はじゃんけんをして、負けた関拍寺が体を伸ばして、受話器を耳に当てた。
「なに！　帝王国が！？　そいつは一大事だ！」
関拍寺の顔が青ざめる。
孫考と大程は顔を見合わせた。関拍寺が巻き込まれていた例の離婚調停が、ついに恐るべき破局へと至ったのだろうか。
「野郎ども！　めちゃくちゃピンチなのだ！」
受話器を置いた関拍寺が血相を変えて怒鳴った。
「ピンチピンチと言うから、ピンチになるんよ」
慌てなさんな、みっともない、という顔で孫考が言った。たかが離婚調停で。
「その通り。世の中は、全てけん玉のようなものです」
大程は木製の玩具を手にとって、遊ぶ。彼は関拍寺に対する助言として言ったのだが、関拍寺の説明を聞き、アルデそのものが、関拍寺の人生と同様にめちゃくちゃピンチになったことを知った。
それでも大程の表情は変わらず、けん玉の動きも止まらない。世の中とは、けん玉のようなものなのだから。
「ということで、軍を送ろう」
孫考が言うと、二人ともうなずく。珍しく意見はまとまった。
しかし、これはむしろ、アルデ軍のとれる行動がそれだけ狭められているということだった。なにせ、帝王国軍がアルデの玄関に土足で上がりこんできたのだ。
大程が自宅に土足で上がりこむと、関拍寺は烈火のごとく怒るが、アルデ軍も同様の行動をとることが求められている。
緑色のヘルメットに、迷彩服という姿の、いかにも軍人っぽい男が部屋に入って来る。紀（のり）発人（はつと）といった。三人組子飼いの、戦場指揮官である。
今回の迎撃はこの紀にやらせよう、という話になった。
「レーザーアイルン三十機に、ヤードーンバスターを二十機、それからフレーズンを二十機出撃させる」

「イェッサー」
紀は敬礼した。これは三人が動かすことの出来る全ての戦力であり、それはつまり、アルデの動かすことの出来る全ての戦力だった。
『レーザーアイルン発進！』
アルデの誇る主力ザーベオンであるティラノサウルス型のレーザーアイルンが目覚めて、天に向かって吼えた。
『ヤードーンバスターも発進！』
こちらはオオカミ型。重砲ヤードンキャノンで砲撃支援を得意とする。
もっとも、彼らは目覚めた端から、大型輸送ザーベオン、グレイラーに詰め込まれていった。戦場に着く前に、移動で疲れてしまってはうまく戦えないからだ。

アルデ軍が戦場に到着するまでの間、三人はそれぞれ必要と思うことを済まし、覚悟を決めると、通信機を前にでんっ、と構えた。
孫考は手元の書類を見るが、帝王国軍のデータは少なかった。本来なら海岸のやぐらに配置された兵士から十分な報告が届いていいと言うのに、彼らは自分たちの命がちょいと危うくなったと見るや、早々と雲隠れしたらしい。
十分な役目を果たさない奴らには、まったくいらいらさせられる。名前は疑島と呉山と言ったか。
孫考は束の間、眉間に皺を寄せたが、すぐにいつもの眠たげな顔に戻った。
『こちらフレーズン三号。敵が上陸を始めました！』
代わりに送った偵察ザーベオンから報告が入る。高空から上陸の様子を偵察しているのだ。
『メントクアが上陸！』
三人の間を緊張が駆け抜けた。半魚人型ザーベオンのメントクア。帝王国の主力戦闘ザーベオンだ。

『ショットスコープも上陸！』
サソリ型のショットスコープ。砲撃支援を得意とするが、格闘戦もできる強者。やっこさんがた、メントクアとショットスコープをぞろぞろ上陸させやがった。本気で戦争をおっぱじめる気か。可能ならアルデを破り、ジュベロ大陸を支配下に置いて、世界征服を成し遂げようというのだろう。
だが、足りない。確かに、メントクアもショットスコープ手強い敵だ。だが、アルデを破るにはもっと強いザーベオンがいる。
もっと、でっかくて、強くて、育てるのにも動かすのにもバカに金を食う、重量級のザーベオンの気配がないのだ。
「連中、大型ザーベオンは連れて来ていないのか？」
「船に積み込み忘れたんじゃないの？」
三人は推論を口にした。偵察のフレーズンが、なおも機械的に報告する。
『申し上げます。目の前にバズレガーが現れました』
始祖鳥型ザーベオンのバズレガー。空棲ザーベオンも抜かりなく揃えてきたか。
と、報告に雑音が混じった。
『申し上げます。撃たれました。三秒後に墜落します』
ドガーン！
『ぎゃー！』
『フレーズン三号は消滅しました』
最後の報告は、コンピューターによる合成音声の声だった。
「はいはい、ご苦労さん」
孫考はさっと兵をねぎらい、通信のチャンネルを切り替えた。
「紀の軍は、どこにいる？」
『こちら紀。グレイラー隊はすでにグォース海岸に到着しました。これより戦闘ザーベオンを展開します』
よし、紀は素早く動いた。敵は大軍だが、紀が野戦築城して敵の進撃を止めさえすれば、こちらは内地から援軍をひねり出せる。対

して、帝王国軍が援軍を送るには海を越えなきゃいけない。
時間をかけて押しまくり、やつらが海にぼちゃんと落ちればこちらの勝利だ。
多くの陸棲ザーベオンは泳げない。鉄でできている。
さあ、戦争の始まりだ。

＜グォース海岸＞
アルデの輸送ザーベオン、グレイラーがのっしのっし歩いて、中に詰めた、もう少し小型の戦闘ザーベオンを産もうと準備していた。その周りではアルデ兵たちが物騒なアサルトライフルを手にうろうろしている。みんな緑色の迷彩服を着ているが、辺りは灰色の砂浜なので、その姿はアルルカンの一団の様によく目立つ。
紀はトランシーバー片手に作業を監督していた。
そのとき。
「ん？」
ずぼっ、と砂を跳ね飛ばして、黒い三角形が地面から生えてきた。その高さは一メートルほど。
それは砂をかき分けながら、アルデ兵たちの間を進んでいく。これは一体何なのだろう？　兵士たちは顔を見合わせ、ひそひそと尋ね合い、さらに紀の方へ疑問の眼差しを向けてきたが、紀だってこれが何なのか知るわけはない。
三角形は徐々にスピードを上げ――出し抜けに、地面が隆起した。砂が百メートルも吹き上がり、その中から黒い流線型の影が姿を現した。
「サメ型ザーベオン『アクアダビンサー』だ！」
地中からの奇襲だった。アクアダビンサーのエアインテイクからごうごうと音をたてて空気が取り込まれる。装甲の下で、シャークブルーの金属筋筒が膨張した。
そのまま空中で体をくねらすと、グレイラーの一匹に頭から突っ込んだ。

その長い首に噛み付き、たちまち暗褐色の血が吹き出た。
装甲化されたグレイラーの首をやすやすと噛み千切り、グレイラーの巨体はゆっくりと傾いで倒れた。
体内に収納されていた連中はひどい目にあっているだろうな。
さらにサメは身を跳ね上げ、頭部の眼がじろりとアルデ軍を見据える。ぞくっ、と紀の背中を冷たいものが走った。
「敵の奇襲だ！　野郎ども、戦闘配置につけ！」
紀は怒鳴りながら、引き金を引いた。アサルトライフルが吠える。
カンカンカンカン……と爽快な音をたてて全弾が弾かれた。
一人のアルデ兵などは手榴弾を投げつける。しかし、アクアダビンサーが尾ひれでそれを打ち返したため、手榴弾は持ち主の手の中に戻ってくる。どかん！
巨大なメカモンスターに小火器で対抗するのは愚かであった。アルデ軍ザーベオンの出番である。
「レーザーアイルン起動！」
周囲のグレイラーから躍り出てくると、サメに向けて砲撃を加えた。
「ファイアー！」
だが、敵もさるもの。薄い光の膜がアクアダビンサーを包む。レーザーアイルンの砲弾は全てはじかれた。
アクアダビンサーは装甲だけでは心もとないと見るや、上着を羽織るような気軽さで防御シールドを張ったのだ。
跳弾はグレイラーやアルデ兵を吹っ飛ばしていく。
だれか、このバカ恐竜をひっこめろ！　砂の上に伏せるアルデ兵の想いが一つになった。
「ならば、ヤードーンキャノンをくらえ！」
ティラノサウルスは下がり、オオカミが大砲背負って、にじり寄ってきた。
人が潜り込めるほどの口径の重砲、ヤードーンキャノンがサメを向く。

ヤードーンバスターは、快速なオオカミ型ザーベオンに、重砲を搭載するという謎のコンセプトを元に育てられた、アルデ軍支援ユニットだ。これを食らえば、アクアダビンサーのシールドごとき、ひとたまりもあるまい。
「ロックオン成功。死ね！」
だが、アクアダビンサーは火を噴かなかった。代わりに、ヤードーンバスターの方が爆散する。
「なんじゃい！」
パイロットが狼狽して叫ぶ。アルデ軍は酔っ払ったザーベオンを連れて来たのだろうか。
いや、新鋭ザーベオン部隊はそんなミスをそうそうおかすものではない。何者かが、背後からヤードーンバスターを狙撃したのだ。
「一体、誰の仕業なんだ？」
「俺たちだぜ！」
紀の疑問に答えるように、ザーベオンの軍団が林の向こうから出現した。
帝王国軍メントクア！　ありえない！　アルデ兵たちは驚きのあまり、サメのことなど頭から吹き飛んだ。
一体、どういう理由で帝王国軍が背後から現れるなんてことがありえるのだ？
先頭のメントクアのキャノピーが開いた。中から、金の飾りのついた黒服の男が立ち上がる。
「帝王国の将軍、ファントードです」
丸顔に手入れした灰髪が乗っているが、その顔に浮かぶのは爬虫類じみた冷酷さだ。
ファントードは砂の上を這いつくばるアルデ兵やザーベオンを見やり、一瞬の嘲笑を放った。そして、次の瞬間、目を吊り上げ口を開くと、アルデ兵たちの死刑を宣告する。
「アルデ軍の貴様らには死んでもらう！　メントクア、ファイアー！」

一斉にメントクアたちが肩や胸から生やした砲を轟かせた。海岸に布陣するアルデ軍は、平等に死と炎を受け入れるほか無い。
アルデ軍は海岸から上陸してくる敵を討つことしか頭に無く、背後を突かれることは想定外だった。遮蔽物なんてものは無い。
レーザーアイルンが自らの体で壁を作って、ヤードーンバスターに反撃の時を作ろうとするが、結局はまとめて葬られるだけだった。

アルデ奥地の安全な通信基地では、三人組が通信機を前にやきもきしていた。
「紀、一体何が起こっているんだ？　紀〜？　帝王国兵を見習って、しっかり報告して頂戴よ」
「フカが暴れているそうだ」
「アクアダビンサーかい。サメだけに、癪（シャーク）に障る奴です」
「ははは……」
通信に耳を澄ませていた関拍寺が口笛を吹いた。
「ファントード将軍、自らお出ましだそうだ。精の出るこったな」
「誰でしたっけ、それ？」
大程が首を傾げる。
「ほら、去年のカクテルパーティーで、程ちゃんがワインぶっかけた人だよ」
「ああ……。嫌な奴だったな」
『兵力の差がありすぎます！　これより撤退します！』
あまりの爆音で、ハウリングを起こしている通信機の向こうから、紀の叫びが聞こえた。
「俺たちの誰かがグォース海岸に行くべきだったんじゃないのか？
これじゃ指揮もできん」
関拍寺が提案するが、大程はぶんぶん首を振った。
「やめてくださいよ。威力偵察だなんて、僕ぁ、まだ死にたくあり

ません」
　別に、威力偵察のつもりで紀を送ったつもりじゃないんだけどな、と孫考は胸のうちでつぶやいた。
　手を伸ばして、通信のチャンネルを変える。
「航空戦力はどうした？　フレーズンが着いていい頃だ」

＜上空＞
　八機のアルデ軍、飛竜型ザーベオン『フレーズン』が奥地からすっ飛んできている最中だった。
　フレーズンのコクピットに座るのは、やはり迷彩服をまとい、緑色のヘルメットをかぶったアルデ兵。
　小隊長はレーダー・ディスプレイ上の細かい目盛りを読んだ。二百四十キロだ。間違いない。
「こちらフレーズン１２号小隊長機。レーダーによれば、二百四十キロ先に敵はいる」
「こちらフレーズン２１号。隊長、嫌な予感がします。なんだかすぐ近くに敵がいるような気がしてならないのです」
　古参のベテランパイロットである副長が言う。
「そんな馬鹿な。レーダーによると、一番近い敵でも二百キロ以上遠くにいるはずだぞ」
　レーダーは雄弁に語る。この小隊長は、もはやレーダーを通してしか現実を認めることができなかった。
「ぬあああ！」
　突然の悲鳴が響く。
「１４号！」
　殿のフレーズンが一撃をくらい、火達磨になって落ちていった。
　雲の海の中から、どこまでも黒い色の翼を広げて敵が現れる。しかし、レーダーは依然無言のまま。
「あれはダークエアサディオン！　帝王国空軍の待ち伏せか！」

ヤタガラス型ザーベオン『ダークエアサディオン』。
「奴は凄まじい素早さを持っている上に、レーダーに映らないという特殊なボディでできています」
副長が叫んだ。
フレーズンはプラズマ・ジェット屁をこきながら推進するので、赤外線波長で見ると尻がまばゆく燃えているのだが、ダークエアサディオンは違う。それは広大で暗黒の翼を広げ、音も無く死を撒き散らす。
「全機、敵をロックオンせよ！」
小隊長が悲鳴と化した命令を飛ばす。
ロックオンに成功した機はなかった。
フレーズンたちは胴体下の三連機銃を撃ちまくるが、黒いカラスはいかなる奇術を用いてか、熱的痕跡も残さずに全てをかわしてしまう。互いに高速で飛びあうドッグファイトでは、肉眼で敵を追い続けるのは無理だった。フレーズンは翻弄された。
電子面の敗北は、そのまま敗北に直結した。
ダークエアサディオンの三本の脚の中で、緑色のエネルギーが溜まって、膨らんでいく。さっと鉤爪が開き、エネルギー弾が解き放たれた。大きく弧を描ながら、暗雲を切り裂くと、かわす術も無いフレーズンを襲った。
その体の装甲が瞬時に蒸発し、中の金属血管や臓器、プラズマ・ガス嚢胞がむき出しになる。三機のフレーズンが爆炎に包まれた。
歯が立たない！　レーダー信者の小隊長はショックのあまり、指揮能力を喪失していた。
「フレーズン部隊、撤退します！」
代わりに副長が生き残りを束ねる。飛竜どもはプラズマ・ジェット屁をひりながら、とんずらした。
ダークエアサディオンはそれを見送り、ゆっくりと雲の中に溶け込んでいった。

「第二波のフレーズンどもも、全て呼び戻せ」
さすがの孫考の顔からも、眠たげな雰囲気はかき消えた。いまや気だるげな雰囲気が残るのみで、これは孫考の本気モードを意味する。
敵が十分に空襲に備えていることは予想できていた。が、それはそれで、フレーズンを送って確かめておく必要があった。それにしても、ダークエアサディオンとは……。
「早期警戒装備のフレーズンはどうしたんだ？　それがいればこんな惨敗はしないぞ」
「最初に撃墜されたフレーズン三号がそれだよ」
なるほど。アルデ軍史に残る惨敗を喫してしまった。帝王国はこちらの手全てを読み、完璧に裏をかいてきた。
思わず、内応者の存在などを疑いたくなる。
さて、これからどうしよう。こちらは虎の子ザーベオン部隊が壊滅。帝王国軍は、思うに無傷だ。
すぐにでも進撃してくるだろう。首都ファラーデを守る方法なんてあるのだろうか。
孫考と大程が頭を振り絞る中、関拍寺は通信機の呼びかけに気づいた。
「将軍が、お呼びだ」
「ファントードさんが？　クリーニング代請求されるのかな？」
大程が弱気な声を出す。
「いや、うちの将軍だ。首都へ行くぞ」

＜アルデ首都ファラーデ＞
人口一千万の大都市、ファラーデ。
ファラーデの一角にフェンスで厳重に防御された一角がある。その向こう、いかにも無理やり作りましたよ的三角形の敷地に高層ビ

ルが建っていた。これこそがアルデ軍最高基地だ。
広い会議室のテーブルに大勢の隊長たちが並ぶ。孫考はスーツで行ったが、関拍寺はいかにも慌てて来たことを強調するかのように、めちゃくちゃな服装。
「お宅の服装、なかなかいいね」
大程が笑って褒めた。
「てめえは、なんでそんなに服装に無頓着なんだよ！」
関拍寺が噛み付く。大程は無個性な白い寝間着のまま会議に出席したいた。
ふいに、会議室がしんとした。立派な口髭を生やし、軍帽をかぶった初老の男が入って来る。
アルデ軍将軍、井甲（いこう）　仙仁（せんじ）であった。
「まずは、戦況報告をどうぞ」
井甲は言った。
孫考、関拍寺、大程は互いに非難がましい目付きを向け合って、報告の役を押し付けあっていたが、やがて大程がやらざるを得ないという気になったらしい。
「分かりやすく言えば、津波に押し流される家々のごとき負け方です」
大程は一同を見回した。
「グォース海岸は、我が軍のザーベオンと兵の血で染まり、敵は破竹のごとき進撃。我が方の民は不安がって泣き叫び、無能なる将は顔面を蒼白とするばかり。世界の終わりがやってきました」
「具体的な数値を上げたまえ」
隊長の一人が要求した。
「ええっと、具体的な被害は……」
大程は口ごもり、脂汗を額に浮かべる。彼は二桁以上の数字を考えるだけで偏頭痛を起こす、数字に弱い男であった。
「それに関しては、この資料をご覧ください」
孫考が自分で用意したプリントを配布し始める。ヒストグラムや

有効桁数を十二とする数字の集まりに、居並ぶ隊長たちは満足したようだ。
孫考は、一つ貸しだぞ、という顔を大程に向ける。危うく首のつながった大程は安堵し、今度はホワイトボードに戦場の様子を描き始めた。
「写真はないのかね？」
「ありません。でも、大丈夫です。兵からの報告を元に、私は再現できます。アルデ兵一人一人が私の目なのです」
だが、まもなく大程は失敗を悟った。
死んだザーベオンのコクピットから覗く、アルデ兵の眼は敗北者の眼であった。一方で、ボードの右半分から攻め寄せてくる帝王国軍はあまりに強大で、無慈悲であった。
これは事実であるが、しかし、絵を見た諸隊長から絶望が広がるのがはっきりと分かった。
「もう結構だ、大程隊長」
井甲が鋼の声で命じた。大程は小さくなって、席に逃げ戻る。
「なんということでしょう。私は絶望を広めてしまいました」
大程は泣きそうな声で言った。
「だったら、例の津波と家々とやらの絵でも描くべきだったんだ」
関拍寺がアドバイスする。
「もっと強いザーベオンを集めてこい」
井甲は隊長たちを指差しながら言う。へいへい、と孫考はうなずいた。
会議はそれで終わりになった。重大な会議を突然、終了してしまうのは、この将軍の十八番であった。
出された命令は、既成の方針であり、そこに改変可能な余地はないのだ。
「さしあたりの手として、岩塩村にでも行ってみるか」
孫考は同期の二人を見やった。
「ほー。あそこの連中に頼るか」

帝王国軍と首都ファラーデの間に、防備はほとんど存在しない。そして、ファラーデが落ちれば、それに続く運命は夜逃げか、自殺か。

是が非でも、今すぐザーベオンをかき集める必要があった。

首都にまとわり付く、ごたごたやしがらみをすべて関拍寺に押し付けると、孫考と大程はレーザーアイルンに飛び乗った。

間に合えばいいのだが。

1―2　岩塩村の傭兵

岩塩村は腕のいいザーベオン操縦士が集まる村である。

しかし帝王国軍は、彼らを殺そうと軍を発したのである。

＜岩塩村＞

岩塩村は、グォース海岸と首都ファラーデの中間に位置する山間の小さな村だった。

歴史的に、塩鉱の存在でファラーデに繁栄をもたらしたが、それも今は昔。しかし、地面のしょっぱさは現代でも健在だ。

ザーベオンを連れて来ると、しょっぱい岩をべろべろ舐めたがるので、見ていて面白い。

それが理由か、岩塩村はザーベオンを個人所有する人間がよく集まるスポットとして知られていた。

彼らの中にはザーベオンを武装化していて、帝王国軍の脅威に対してアルデ軍に力を貸してくれるものがいるかもしれない。それが孫考の最後の希望であった。

岩塩村唯一のパブ。

大勢の男たちが店の中でたむろしていた。いかにも荒れくれ、という風貌の人間で、ザーベオンを使って合法非合法の仕事をこなす奴らだ。

店の中は煙草の煙が濃く、三分に一度は喧嘩が起きていた。

そこへ、一人の若い男が叫びながら店に飛び込んできた。

「大変だー！　帝王国軍が攻めて来たぞー！」

「なに！？」

店内にいる男どもは顔色を変えた。

戦争とは、結局、経済活動である。それに関わるという、ある意味の投資活動を望まない連中は、村から逃げ散った。

「ぎゃー！　逃げろー！」
「殺されるぞー！」
それは、つまり、村の人間ほとんど全てが逃げ散ったということだった。天地がひっくり返るほどの騒動が済んだ後、パブに残ったのは二人の男のみ。
縁藤（えんどう）　勝（まさる）は小柄で、いつも目を細めているせいで、微笑んでいるように見える男であった。右目にはＥＵＤ（アイ・アップ・ディスプレイ）、肩にはマントを羽織り、背中にショットガンを背負った姿は、まるで時代劇に出てくる防人に見える。
店の反対側にいるのは、川強（せんごう）　連人（れんと）。こちらは長身で、洒落たゴーグルを顔に乗せ、口には煙草をくわえている。現代のワイルドな男というイメージをまとっていた。
背中に錫杖を背負っているのは、原始宗教の信徒であるためと思いきや、川強は主にこれを人をひっぱたくために使っている。
二人は相棒同士という間柄ながら、パブでは隣に座るという習慣すら持たなかった。
「やけに静かになったのう」
縁藤が言ったが、その手に握られたフォークとナイフは休まない。
「帝王国軍が来たら、食事も飲酒も中止して、逃げにゃならんっつう決まりでもあんのか？」
「ねぇだろ。岩塩村特有のイベントという奴だ。構うことはねぇ。貸し切りと思おう」
川強は言って、ビールを飲み続けた。

パブの外には帝王国の精鋭メントクア第一部隊が到着していた。
それを率いる中佐は、パブという看板に魂が引き寄せられるのを感じながらも、帝王国軍人として、こまめな報告を怠らない。
「こちらメントクア部隊。村には誰もいないみたいです」
中佐の乗るメントクアは、ファントード将軍専用機で、普通のメントクアより強い。ファントード本人は急用で帝王国本土に帰って

しまったため、専用機だけが戦場に来ていた。
『こちら指令本部。みたいです、というのは不十分にして、不確実である。完全に確認せよ』
「イェッサー」
『しかる後に、村をぶっ飛ばせ！　通信終わり』
「イ……イェッサー」
二人の帝王国歩兵がメントクアから飛び降りた。全身をくまなく白いアーマで覆い、頭もヘルメットで完全に保護している。
「おそらくパブの中に敵は残っているだろう」
二人は味方に告げて、サブマシンガンを手に店に入っていった。
「動くな！」
帝王国兵は怒鳴る。彼らは本気で人がいると思っているわけではなく、目当ては店に残っているであろう酒だったが、
「なんか言ったか？」
悠長に酒をあおる川強が振り向いて、帝王国兵は驚いた。
「動くなっつってんだろ！　武器を捨てろ！」
帝王国兵は、驚きを打ち消そうと、大声を出す。川強はいい笑顔を浮かべる。
「ぬあぁぁ！」
傭兵が背負っていた錫杖はいつの間にか、帝王国兵の首を貫通して、壁に縫い止めていた。
「ちゃんとお願いします、を付けようぜ」
川強は口の右側で煙草を吸いつつ、左側からビールを流し込んだ。帝王国兵のアーマーの隙間から血がほとばしる。
「おのれぇぇ！」
やっと何が起こったのか理解した、もう一人の兵士が銃を構え直した。
縁藤は現状に驚いてなどいなかった。死んだ帝王国兵は、過去に川強に絡んだ多くの暴力的な酔っぱらいと同じ道を辿っただけのこと。縁藤はさっと、生きている方の帝王国兵の背後に立つ。わずか

に目の覗くヘルメットの構造から思った通り、視界が悪いらしい。敵は縁藤の動きに反応できなかった。
ショットガンを帝王国兵のアーマーの腰の関節部に押し当てて引き金を引いた。
アーマーはザーベオンの鱗を原材料としたもので、小銃弾など弾き返すことができたが、今はそれがあだになった。縁藤が打ち込んだ散弾は、アーマー内で際限なく反射して、中にいる帝王国兵を肉と骨の混じる血のスープのようにしてしまった。
二人は、広がる血だまりと、その真ん中の白いアーマー姿の死体を見下ろした。
「……こりゃ帝王国軍人かいな」
「アルデでこんな格好してる奴がいるとすりゃ、そいつは馬鹿だ」
川強は椅子をブスっと刺して、詰め物で杖の血を拭いた。
「戦争が始まったのか」
ラジオも新聞もやたらとそのことを強調していた。しかし、実際に静かに酒を飲んでいて帝王国兵に絡まれるとは、平和な時代が終わったことを実感させてくれる。
「戦争が始まったんなら、ザーベオンを乗り回すやで」
「名案だ」
川強はカウンターから酒瓶をくすねながら言った。
帝王国軍はまるで気付いていないが、岩塩村のザーベオン駐機場は全て地下に埋設されていた。傭兵なんて奴らは獰猛で、常識はずれなザーベオンばかりに乗るので、こうでもしないと、住民が落ち着かないのだ。
二人はパブの裏手に出て、地面から生えたパーキングメーターに貨幣を入れた。
「わてがこの前の収入で、何のザーベオンを買うたか分かるか？」
「分からねえ」
想像もつかない。
「五億ゴールドの首の報酬で、ザンファーレーンを買うたんや」

二人の前のアスファルトの地面がゆっくりと割れていく。そして巨大な籠が二つ、地中から現れた。中におさまるのは、二人の傭兵のザーベオンたちだ。
縁藤のザーベオンはライオン型のザンファーレーン。
レアものだ。川強も、初めて見る。値段の高さ、整備の難しさ、実戦データの少なさという三拍子揃ったこいつは、いままであらゆるザーベオン使いの職種から敬遠されてきたのだ。
だが、縁藤はこの手の常識をくつがえす。
機体は赤く塗装されていて、用途のよく分からない装備が体の各所から生えていた。
「ほぉー、いつの間にか五億も稼いだのか。俺のザーベオンは、今も昔もしがないガンベータスだ」
川強のザーベオンが出て来る。トラ型のガンベータス。流線型を極めた体に、口から生えたサーベルタイガー風の牙が目立つ。
戦闘用にしては妙なことに、火器を搭載している気配がなかった。これは川強の美学に由来した。
二人はそれぞれのコクピットに収まると、ゆっくりとザーベオンを進めた。
「じゃ、メントクアでも何でも潰して、アルデから賞金頂こうかの」
「なるほど、五千万ゴールドくらい頂くとしよう」
川強は自らもらう賞金の上額を定め、人生を秩序で律した。
「いくぜ！」
川強はペダルを踏み込んだ。ガンベータスが走り出す。通常のザーベオンでは考えられないほどの加速だった。
「レーザーソード・オン！」
トラの背中の装備が起動した。光の剣が生み出される。それはトラの体の両側へと伸びた。
これを使ってすれ違いざまに、敵を斬るわけだ。
ガンベータスは足の速いトラ型ザーベオン。それに、どこかの軍隊のオオカミ型ザーベオンのように背中に大砲を乗っけたりもして

いないために身軽極めた。
さながら一閃の稲妻だ。メントクアの傍らを駆け抜けると、束の間を置いて、メントクアが真っ二つになった。
「敵だ！」
黒い服にヘルメットとエアマスクという出で立ちの帝王国軍パイロットは、メントクアの足元で、凝ってしまった肩をどうにかしようとしていたが、ようやく襲撃に気づいて、自機に駆け戻る。
「川強、援護するやで。ロング・グラン・ライフル、オン」
ライオンの背中から肉腫が膨れ上がった。これは砲台だった。
ロックオン成功。
「ファイアー！」
砲弾が、いまだパイロットが起動準備に手間取るメントクアを強打した。腕と尾が吹き飛び、メントクアは大量出血を始める。
「続いてマシンガン攻撃！」
今度は腹の方から肋骨をこじ開けて機関銃が生えてきた。ザンファーレーンは全身に武器を潜めているのだ。
二列の曳光弾が、動きの鈍いメントクアの一機に叩き込まれる。これでもか、という銃撃に、装甲が火花を散らしまくった。
頭部のキャノピーに無数の白いヒビが走り、その向こうで帝王国軍パイロットが破裂する。メントクアの方も体中から煙と血を流して崩れた。
縁藤はたちまち二匹葬った。だが、撃ち過ぎるということもしない。砲身の劣化は防がねばならないし、弾丸もこのごろ高価だ。この辺が軍人と傭兵の意識の違いだった。
一方で、ガンベータスは遠慮など知らない。ものすごいスピードで岩塩村の中を飛び回る。
長い牙とレーザーソードは画具。メントクアの血は塗料。
メントクアどもは同士討ちを恐れて反撃もままならない。そこで村の中心に固まり、ガンベータスに対して弾幕を張ろうとするが、その前にザンファーレーンの砲弾が襲ってくる。

帝王国軍中佐は喉の奥でうなった。
川強はだいぶ調子が出てきたので、先日開発した技を試すことにする。
「秘技、かざぐるま！」
トラの背中のレーザーソードが回転を始めた。みるみる回転スピードは増して、それは金色の円盤にしか見えなくなった。
怪異、トラ型ヘリコプター。
ガンベータスの脇腹から青いイオンの炎が噴き出し、ガンベータスは急加速する。川強は強烈なGで座席に押し付けられる。
トラは同時に二匹の半魚人に飛び掛ると、前足で一匹ずつ地面に押さえつけた。頭の上で高速回転するレーザーソードがメントクアを千切りにしてしまった。
「さて、残るは一匹。潰すか」
返り血で真っ赤のガンベータスが残ったメントクアを睨んだ。
「あまいぜ！」
帝王国軍中佐は金切り声を上げて、ファントード将軍から託された鍵をメントクアの計器に差し込んだ。
大柄なメントクアは咳き込み、頭を振ると、口の中からねばつく液体にまみれた物体を吐き出した。
川強は目を細める。卵を産んだ？
いや、メントクアは口から子供を生まないタイプだ。産道を別に持っている。
しかし、吐き出されたのは、ザーベオンだった。体を振りながらゆっくりと立ち上がる。体長一メートルほどで、二足歩行をしている。
メントクアの子ではない。これは寄生タイプのザーベオンだ。
寄生体なんかが体内にいると、被害者のザーベオンは体力を吸われてしまう。侵攻軍の体内に寄生を許すなんて、帝王国軍は何を考えているのだ？
「メントグランダー、合体だ！」

中佐が叫ぶと、そのザーベオンは明確に反応した。
『イェッサ』
しわがれた声で言うや、跳躍したのだ。
その小型なザーベオンは装甲の隙間からメントクアに体をねじ込む。その周囲でメントクアの肉が膨らんだ。
金属色の粘液がメントクアの体中の気孔からほとばしり、空気中で酸化していく。
下半身では脱皮が行われ、新たな尾がより太く、よりまがまがしく化して、のたくった。
「なんだと！？　ありえん」
川強は思わず煙草を噛み締めた。
急速進化現象。
メントクアが体をのけぞらせると、天に向けて吼えた。それに合わせて全身から棘が伸びる。
いや、もはやメントクアではない。その進化体、メントザーバーだ。
川強の喉仏が上下した。
「進化しとんのか？　棘々になっちょるようにしか見えんが」
「いや、進化だ」
直感的な川強は理解していた。
こうなっては、進化が完了する前にすべてを終わらせてしまうしかない。
「くらえ、かざぐるま！」
トラが飛びかかる。
わずかに遅かった。
「バックトマホーク！」
最前までののろまな動きが嘘のように、半魚人型ザーベオンは旋回する。
ガンベータスであってさえ、とてもかわしきれず、前足の付け根の装甲を、メントザーバーの斧のような尾で一撃された。

トラは宙を舞い、パブに突っ込んで押しつぶす。
「やばいな……」
川強はつぶやいた。だが、いかにコクピットを揺さぶられようと、タバコは口から離れない。
『右足ダメージ６８％。主要神経に切断あり』
コンピューターが落ち着いた声で告げる。

縁藤はうおおっと雄叫びを上げると、左手で計器のボタンを押した。コクピットの座席の後ろから照準器が出てきて、傭兵の左目を覆う。
縁藤の右目には初めからＥＵＤがあった。両目で仮想照準を見るということは、立体感を知覚できることを意味する。
「食らえや！　ファイア！」
砲が火を吹き、さらに縁藤は弾丸が標的にぶつかるまでの一瞬の間、弾丸を遠隔操作した。
狙うは敵のコクピット。
「シールド・オン！」
メントザーバーを包む空間が停滞する。砲弾は敵の眼前で止められ、爆風はシールドに沿って薄く拡散した。
敵は進化によって、シールドを生み出す能力を得たのだ。進化というイベントは実に驚異的だった。
「この無敵シールドにはどんな攻撃も効かないぜ」
中佐は嘲笑を放った。
ならば、接近戦だ。ザンファーレーンは駆け出す。
無論、シールドを展開した敵に体当たりを仕掛けても、弾き返されて終わりだ。だが、五億ゴールドは伊達じゃない。ザンファーレーンもシールドを羽織ることができた。
これで矛盾をつくのだ。
無敵シールドに無敵シールドをぶつける。こうすれば何かが起こる。

それがいい結果かどうかは分からないが、現状を打破するという一点のみに着目すれば、それは果たされる。
ザンファーレーンは跳躍し、空中で質量なき防壁を呼び出した。シールド同士がぶつかり、干渉し合った力場から紫電がほとばしる。
これはもはや両者の性能はなく、気迫の問題であった。
絶対防御の空間がゆっくりと口を開け、ついにはザンファーレンの頭が通るまでの大きさとなった。
ライオンの口が開き、ビームが火を噴く。メガロタークアの全身で爆発が起きた。
やったか？　メントザーバーの張っていたシールド内部に煙が充満した。一瞬後に、シールドは瞬いてこの世から消失する。
ダメージで、メントザーバーの集中力が切れて、シールドが維持できなくなったのだ。
「やるな」
煙を突き破って、半魚人がぬっと現れる。
「けど、シールドを破っても、そんなの攻撃じゃメントザーバーを破壊できないぜ！」
すでにザンファーレーンのシールドも存在しなかった。半魚人はライオンの頭をぶん殴り、地面にたたきつける。
とどめを刺すべく、メントザーバーは太い腕と、金属の塊である拳を振り上げた。
「じゃあ、こんな攻撃はいかがかな？」
いつの間にか、深手を負ったガンベータスがメントザーバーの背後に忍び寄っていた。
「なに！？」
「どぉおりりゃあ！」
川強が吠えた。密林のハンターであった過去を思い出したのか、金属のトラは長大な牙を、深々と獲物に食い込ませる。
さらに首を猛然と振る。悲鳴が上がった。メントザーバーのパイ

ロットが狼狽してあげたのではない。襲われた獲物である金属の怪物が上げたのだ。
ガンベータスは己と同じぐらいの大きさの獲物をくわえたまま、それを振り上げた。
ザーベオンの血液が雨のように降り注ぐ。そして、とどめはガンベータスの背中のレーザーだった。
輪切りになったメントザーバーの体が、地響き立てて大地に転がった。

「いやぁ、いい戦いだった」
バンズ・バーマキー産の極上の葉巻を二人は口にくわえた。
川強は、我が口の正体は煙突なり、とでもいうかのように、すぱすぱタバコを吸うが、几帳面な縁藤の方は勝利後の一服のみを自分に許していた。
トラとライオンは、メントクアの死骸をまずそうに食べ始めた。
と、燃え上がるメントザーバーのキャノピーが開き、ボロボロの男が飛び出してくる。
「ファントード様〜！」
男は絶叫しながら、手足を振り回し、グォース海岸へと逃げていく。
どうする？　川強は目顔で尋ねるが、縁藤は興味なさげに肩をすくめるだけだった。勝利後の儀式を中断する価値は無い。
「それより、アルデ軍に金をもらいに、ファラーデへ行こうぜ」
そのとき、路地から金属の足がにゅっと現れ、逃げる帝王国兵を踏み潰してしまった。
「ファラーデまで行くには及びませんよ」
アルデ軍主力戦闘ザーベオンがのっしのっし歩いてきた。
「レーザーアイルンや」
二頭の猛獣は身構えた。だが、レーザーアイルンは戦意を示さず、立ち止まって身をかがめると、キャノピーから二人の人間を吐き出

した。
スーツ姿の、まったりとした雰囲気の男と、無個性目指してのことか、上下を白色でまとめた私服の男が降り立つ。

「ハロー、アルデ軍通信隊長の孫考です」
ゆっくりと敬礼しながら孫考は言った。さっさと本題に入る。
「知っての通り、我らアルデは帝王国の攻撃を受けております」
「おい、僕にも自己紹介させてくださいよ」
後ろで大程が文句を言った。
「単刀直入に言いましょう。あんた方に、アルデ軍に一時的に加わっていただきたい」
孫考の眉が持ち上がり、目蓋の下で目が鋭い光を発した。
「私たちの母国はいま、未曾有の危機にさらされているのです」
「単刀直入じゃない言い方を使うと、どうだい、お宅、アルデの潤沢な兵器とザーベオンをバックに、帝王国のクズどもの尻を蹴っ飛ばしたくはありませんかな？」
後ろで大程が言って、自分の言いように微笑んだ。
傭兵たちは、スカウトマンたちを評価する目付きで眺めていたが、やがて縁藤の方が口を開いた。
「で、契約金としては、いかほどの額を頂けるので？」
孫考は懐から電卓を取り出した。
「手始めに、二億ゴールドということでは？」
すでに、井甲将軍からいくら金を使ってもいいという白紙委任状を入手してある。
だが、この傭兵どもに金をやりすぎるのも駄目だ。そんなことすれば、なめられる。
「いいねぇ」
ザーベオンを所有するのには、いろいろとコストがかかるわけで、縁藤は笑顔を見せた。
「それは契約金だよな？　たったいま、潰した帝王国軍の報償を頂

けたら嬉しいのだがな。俺のガンベータスは酷く怪我したんだ」
「はいはい。いくら？」
「五千万ゴールドを心に描いて戦っていた」
「ほいほい」
孫考は渋面を意識的に作って、電卓を叩いた。
縁藤は廃墟と化した岩塩村を振り返り、まだメントザーバーが煙を上げながら転がっていることに気付いた。
「あの死体、わてらから買わんかい？　なんやか、珍しゅうザーベオンに見えんのやが。どや、一億で」
「高っい、焼け焦げた死体だなぁ」
大程が力なく笑った。
「おい、ガンベータス、メントザーバーの死体も食っちまえ」
関拍寺がここにいたら、外道が、足下を見やがって！　と騒いだことだろう。
だが、孫考は大きく息を吐くと、
「分かりました……言い値で買いましょ」
貴重な帝王国軍主力戦闘ザーベオンの進化体だ。
戦闘中に突如進化したのは、偶然なのか。それとも、まさか……。
孫考は電卓を懐にしまった。
使った金などは、取り返せば済むこと。

塩の味がする風が吹く中、ザーベオンたちとそれに乗る人間は去っていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2056j/

機械怪物戦争ザーベオン

2010年10月12日07時55分発行